

① 毎週
② 強かった
③ 茶店

④ 小刀
⑤ 会社

② ① イ
② A イ
B ア
C ウ

③ ア
④ 2

⑤ 防水性

⑥ ア
⑦ 2
⑧ イ
⑨ 1

③ ① 黒板の花太郎さん

② A ウ
B オ
C ア

③ ② ウ
③ イ

④ 友だち

⑤ ア
⑥ イ

配点	
①	各2点×5=10点
②~③	各5点×18=90点
<hr/>	
＜計＞100点	

1 小学校2年生までに学習する漢字から出題している。①「毎」の下の部分は「母」とは形がちがうので気をつけよう。「週」は「しんにょう」の二画目と三画目で輪を作るように書いてはいけない。②「強」は「弓」の部分を書きこくこと。③「茶店」はお茶や菓子などを提供するお店。④「刀」が「力」にならないように気をつけて書こう。⑤「社」の右側の「土」の上の横棒を下を下の横棒より長くしてしまうと「士」という別の字になってしまうので気をつけよう。

2

1 線①の「それ」というのはもちろん「ネコは、水が大きらいな動物といわれる」ということをさしている。つまり、——線①は「ネコは、水が大きらいな動物なのはほんとうだろうか」という問いである。それにたいする答えがはっきりわかるのはイである。

2 A 「一見水が好きそうなネコ」の例をこのあとで出しているので「たとえば」がはいる。

B 「一見水が好きそうなネコ」の例をならべているので「また」がはいる。

C 「一見水が好きそうなネコ」について、このあとで実際は「決して水自体が好きわけではない」と否定しているので、「しかし」がはいる。

3 「そんなネコの性質が知られているため」に「しずかにさせるには、水をかけるとよいといわれる」のだから、「水がきらいな性質」以外はあてはまらない。

4 すぐあとで説明されている、ネコの祖先が砂漠にすんでいたリビアナネコだったということと、次の段落で説明されている「ネコの毛が水にぬれるのに適していないから」ということの二つである。

5 「毛がかわかない」という話はこの段落の話題なので、段落の内容をよく読もう。イヌとくらべてネコの毛は「防水性があまりないため」と書かれていた。

6 A 「ネコもこの性質を受けついでいるためかく砂地でゴロゴロと転がりがるネコが多い」とあった。ここでの「この性質」はリビアナネコの性質のことである。というわけで、「かんけいがない」とはいえないだろう。
イ 最後の段落にイヌの毛について「からだをブルブルツとふるわせると、ぬれた毛はすぐにかわく」と書かれている。

3

1 続けて読んでいけば、「花太郎さんをおこらせたら心霊現象がおきるんだぜ」といっているので「花太郎さん」が妖怪だと見当がつけられる。これを手がかりに八字ちょうどになるものをさがすと、文章の後半で「黒板の花太郎さん」が出てくる。その直前でも先生が「どうして妖怪の話が出たんだ?」といっているの、妖怪の名前が黒板の花太郎さんであることは十分わかるはずである。

2 A はじめから、恵一は亮をからかうことを目的に行動している。ここでもランドセルをいきおいよく置くことで亮をおどろかせていると考えられる。よって答えは「ドン」となる。「パンツ」はCで使わなければならない。

B 恵一がいきおいよく置いたランドセルでおどろいたので「びくっ」がはいる。

C 「先生はもう一度、ドアを」とある。一行前に「パンツ!」と先生がドアをたたいた音が出ているので、ここは「ドン」ではなく「パンツ」である。

3 一行目から「こわいこわい」といいつつ、本気ではなさそうである。すぐ前の「おれをひとりにはしないで」〜「そっちこそー」というやりとりは、あきらかにふざけているように感じられる。すぐあとの「花太郎さんなんて、本当は信じていないんじゃないかな」とも結びつけると、恵一たちはこわがっているのではなく、亮をからかうために妖怪の話をしているとわかるだろう。

4 このあとの相談室で先生は「友だちを傷つけるようなやつは、ぜったいにゆるさないぞー」といっている。

5 恵一のふざけた口調にみんながわらっていたのを止めようとしたのが加奈と拓真であった。その「わたしたち」までがいっしょになっておこられるのは納得がいかないだろう。

6 すぐまえの先生の話聞いて「なあんだ、そっかあ」となっているのだから、その話にたいして安心したものをえらばなくてはならない。先生に話した「加奈がおねえさんから聞いたうわさ」とは亮くんが黒板の花太郎さんだと思わせるうわさだったのだろう。いつもの熊田先生にもどったのは、——線⑥よりもあとであるからアではないし、亮くんの事情がわかっただけで「妖怪の正体がわかった」わけではないから、エもちがう。